

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ギリシャ幻想小説序説 : 後ビザンツ期から十九世紀末まで
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 23 : 31 - 59
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044337
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



現代ギリシャ幻想小説序説

—後ビザンツ期から十九世紀末まで—

橘 孝司

國立臺中科技大學應用日語系助理教授

1. はじめに

中世ビザンツ文学は圧倒的多数が擬古体の言語で書かれた神学、歴史、諸科学、文献学、書簡などが占めているが、平易な文体による、肩の凝らない民衆向きの作品も少数ながら残されている。それらはたいてい作者名を掲げぬ韻文作品であり、詩人たちは貧乏学者の不満やら、父が子に授ける人生訓やら、同時代の年代記などを、時に皮肉たっぷりに、時に真摯に語る。中には、特に幻想や驚異や超自然の要素に溢れる娯楽的な作品もある。独立不羈の辺境の戦士ディゲニス・アクリティスは三つ首の竜や伝説のアマゾン族の女剣士と対決し、恋愛譚の主人公カリマコスやリヴィストロスは魔法の指輪を携えて冒険へ旅立ち、美女を竜から救い出す。アレクサンドロス大王は潜水艇で海の底を訪れ、空想の王国では動物や魚や果物が騒々しい会議を開いて相手を野次り倒す。

現代人にとってお伽噺でしかないこれらの怪異や化物や精霊が跳梁する幻想の世界は、その後、ギリシャ文学の世界でどうなっていくのだろうか。例えば現代作家のカザンザキスやセオトカスの描くイラクリオンやコンスタンチノーブルのリアルな情景の前に姿を消してしまうのか。こういう疑問が浮かぶのは、西欧諸国での幻想文学の流行、例えば十八世紀の英国ゴシック小説や十九世紀のホフマン、ポオ、ゴーゴリ、メリメ、あるいは下ってマッケン、ブラックウッド、ラヴクラフトなどの描く幻想怪奇小説の興隆が念頭にあるからなのだが、もはや現代ギリシャはこのような異世界への畏怖や恐怖とは無縁なのだろうか。

しかし考えてみれば、ホメロス、アリストパネス、ルキアノスを大先輩に持ち、ローマ、ビザンツ期の小説でも奇想天外な冒険恋愛を謳いあげた潮流が、十九世

紀以降の現代文学にあって空想の羽撃きを止めてしまったとは思えない。「あらゆる偉大な芸術作品には霊的なものが宿っている（小泉、1915:138）」はずである。

そこで、本稿では十九世紀に始まる現代ギリシャ文学が幻想的な要素をどれほど留めているのか、という点を探ってみたい。とは言え、筆者の手に余る広範なテーマであり、とりあえず幻想的な散文作品、それも短編小説を対象とするにとどめる。

2. 幻想小説とは

古代中世以来、人智を超えた超自然の存在事象—神々、巨人、亡霊、怪物、悪霊、妖精、魔法など—が登場する物語は洋の東西を問わず途切れることなく作られてきたが、同じ怪異を扱っているとは言え、これらの神話、民話、お伽噺の類と近代になって現れた幻想小説とは根本的なところで異なっているらしい。ロジェ・カイヨワ（1966:272-4）によれば、古代中世の「妖精物語」は現実世界とは無縁なところに設定された統一的な世界の物語であるが、近代の「幻想小説」は現実世界へ異界のものが突如闖入してくる畏怖恐怖の物語であるという。この違いは、「妖精物語」がたいていハッピーエンドに終わるのに対し、「幻想小説」は主人公が破滅して終わる（その結果現実社会は安定を取り戻す）ことが多いという点にも繋がる（p.274）。

澁澤龍彦は同じ概念に「夢幻」と「幻想」あるいは「フェリック」と「ファンタジー」の語を当てるが、挙げられた「竜と幽霊」の例が分かりやすい。「フェリック」で聖ゲオルギウスが戦う竜は恐怖を惹き起こしはするが、畢竟主人公たちと同じ世界に住む、ライオンと同類の猛獣に過ぎない。しかし、「ファンタジー」の幽霊は全くの異界の裂け目から突然現れこの世に恐慌を撒き散らす。（澁澤 1970:18）

もう一つ、カイヨワは「恐怖とのたわむれ」という大切な視点に触れている。幻想小説の作者は怪異の物語を信じているわけではなく、読者にその信憑性を納得させようとしているのでもない。物語の出来事からは距離を置き、素材を巧みに配列し改変し、創られた作品として読む人に提供する。（pp.283-4）

実はこの点は「幻想小説」のみならず、「虚構性」を前提とする近代「小説」の成立とも関係している。そこでは、「作者」と「語り手」と「（語られる）内容」の乖離がある（西崎、1998:201, 210）。「妖精物語」では出来事は無条件に事実として提示され、「作者」や「語り手」が立ち現れる必要はない。「ディゲニス・ア

クリティス」の後半では英雄自身が語り手となるが、三人称の語りとなんら変わらない。ところが、幻想小説となると、「作者」の企みは複雑になる。あえて「語り手」に誤謬を犯させることもあれば、「作者」が「語り手」の思想に共鳴しないこともある。理性的な「語り手」が超自然の幽霊という「内容」を受け入れられず恐怖に苦悶するのはホラー小説へ常套手段である。かくして、「内容」から距離を置く「作者」は「恐怖とたわむれ」る余裕を持つ。

カイヨワが「幻想小説」と言うとき、具体的に念頭においているのは 19 世紀初めから半ばにかけて欧米各国で興隆したジャンル（ホフマン、ポオ、ゴーゴリ、バルザック、メリメ、ホーソン等）のことであり、「地中海一帯は別にして、大西洋兩岸における西欧文明全域において、1820 年から 50 年ごろにかけてのほぼ 30 年間に、幻想文学という未開のジャンルがその代表的作品群を生み出しているのである (pp.287-8)」(下線筆者)。ここで例外に入れられてしまった「地中海」のギリシャは、この時期、独立を宣言してオスマン帝国と激戦を繰り広げた末ようやく 1830 年に西欧列強に承認され、バイエルンから王を迎えて新王国となり、1843 年クーデターによって形式上憲法・議会を持つ近代国家になったばかりの黎明期である。文学史的にはエプタニサ諸島に民衆語による抒情詩が起り、アテネでは純正語による浪漫派の詩と長編小説が発達していく。それでは、ギリシャ文学では素朴な「妖精物語」から異界が闖入する「幻想小説」への進化は、いつごろ、どのようにして行われるのか。その段階で、同時に、「作者」「語り手」「内容」が乖離し、「虚構」を扱う「(幻想) 小説」が成立するのか。それとも、カイヨワの指摘する通り、そもそも子供向けのお伽噺に過ぎない「幻想小説」などへは進むことなく、リアリズム至上主義の潮流が出来上がってしまうのだろうか。本稿は以上の点を探ろうとするささやかな試みである。

3. 調査対象

現代ギリシャ幻想小説を概観するにあたっては最適なアンソロジーが存在する。(というより、そもそも類書が他に見当たらない¹⁾。) マキス・パノリオス編『ギリシャ幻想短編小説』(Μάκης Πανώριος, *To Ελληνικό φανταστικό διήγημα*, 1987-2012, Εκδόσεις ΑΙΟΛΟΣ) 全六巻がそれである(以下『幻想短編』と略。巻数はローマ数字で表記)。編者は自身作家で俳優でもあり、第一巻所収の自作「壊滅 *Η καταστροφή*」(1982 年)で執拗に描かれる地獄絵図から見て、作家の毒を存分に持つ人ようである。

このアンソロジーは、大先達ルキアノスの「本当の話」を番外として、後ビザ

ンツ期から現代までの作家全 197 名（一人一作、各巻約 30 篇）の幻想短編小説を収録する。僅か 1 ページの散文詩風から中編に近いものまで長さはまちまちである。幻想的な味わいのものが対象なので、作家の代表作とは思えない意外な作品が選ばれることもある。

最初から六巻ものとしては企画されておらず、第一巻（1987 年）が好評につき第二版が出た後、第二巻（1993 年）以降が刊行されていったらしい。ただし第二巻の序言によれば、第一巻に収録できなかった作品もその後発表の機会があることを確信していた、という（II, p.9）。作品は各巻ごとに著者名のアルファベット順に機械的に並べられている。第六巻だけは 2003 年以降に発表された若手作家の作品に集中して選ぶ。

第一巻の序論で編者は古代中世から現代までのギリシャ文学に盛られた幻想の要素を概観する。幻想文学とは「正統なものに正統ならざるものが入り込み衝突する一例えば、墓から起き上がる死体、生きている彫像、獣に変身する人間のように」（I, p.9）という特質を持つ（カイヨワの、安定した世界に異質なものの裂け目が生じる、と同様のことを言っているのだろう）とした上で、ギリシャ文学総体から見ると、幻想的な作品が中世以降発展しなかったことを編者自身も認める。幻想が育つには、西欧の霧に埋もれた森や城や寺院のような適切な風土雰囲気が必要なのだと。それでも、執拗に膨大な作品群を渉猟した成果がこのアンソロジーにまとめられているのである。

本稿は、この労作を利用して、後ビザンツ期から 19 世紀末までの幻想的な短編作品を、文学史の区分にしたがって概観していく。あくまで編者が幻想小説ととらえるものを収めているので、必要と判断される場合は作家の他の作品も引用する。（なお、『幻想短編』所収作は作家名ともどもゴシック体で表記する。）

4. 後ビザンツ期

15 世紀半ばビザンツ帝国はオスマン帝国に占領され、文学活動の中心はクレタ、キプロス、ドデカニサ、エプタニサなどの島嶼部に移った。特に 16、17 世紀のヴェネチア治下のクレタ島では Γ. ホルタツィスと Β. コルナロスを最高峰とする文学が花開く。ただ、それらの内容は悲劇・喜劇・恋愛・歴史・冒険・騎士物語・天地創造から地獄巡りと実に多彩でありながら、いずれも韻文作品（定番の十五音節詩）であるため、『幻想短編』の対象にはなっていない。

この時期の作品からは三編が選ばれているが、もっとも古いものは、**ニカンド**

ロス・ヌキオス（Νίκανδρος Νούκιος、1556 年頃没）「**ケルキラで目撃された怪物について** *Περί του οφθέντος εν Κερκύρα τέρατος*」である。エプタニサ諸島の最北端ケルキラ島出身のヌキオスは戦火を逃れベネチアに移住、写字生として生計を立てる。神聖ローマ皇帝カール五世の使節団に従ってコンスタンチノーブルやイタリア・ドイツなどを旅し、その旅行記『歴遊記 *Αποδημίες*』三巻を著わした。但し 1841 年まで草稿のままにとどまる。1543 年に初の現代ギリシャ語訳『イソップ寓話集』印刷本を出し、以後三世紀に渡って再版され続けるほどの人気を博した（Παρασόγλου, 1993:69）。

この作品は『歴遊記』の一部抜粋であり、農夫が畑で作業中、王冠を戴く巨大な竜（δράκων）と槍を携えて従う竜の一団を目にする奇怪な話と、盗みの罰で目を潰された罪人が夢に聖母を見て再び視力を得たという奇蹟の話が語られている。前者は後に島を襲うトルコ軍の隠喩であることが明らかとなり、後者でも、奇蹟の後には破滅が将来するという伝説が現実化したと述べられる。実際、その後の戦火ゆえに作者の家族もベネチアへ避難することになった。民話、奇蹟譚の体を取りながらも、同時代の政治社会的情勢と密に繋がっている。

次に、16 世紀後半にクレタのベネチア家系に生まれた**アガピオス・ランドス**（Αγάπιος Λάνδος、1656 年頃没）の「**魔術師ヘリオドロスの物語** *Ιστορία του μάγου Ηλιόδωρου*」。アトス山で修行するが、トルコに支配された同胞の精神を高めるには説教と書物による教化が必要との強い信念を持っていたようで、後エーゲ海の島々・ペロポネソス・ヨアニナ・ケルキラなど各地を説教して回るとともに、平易な口語で著わした多くの聖者伝などをベネチアに携え出版した。精神的な糧のみならず、隷属民の窮乏する実生活の助けとなるよう作付けの仕方から害虫の駆除まで指南した『農業の書 *Γεωπονικόν*』（1643 年）も書いており、誰でも読める文体の、十冊を超す著作は二世紀にわたり、隷属ギリシャ人の唯一の読み物だったとされる（Κωστούλα, 1991:23）。

ヘリオドロスは傲岸不遜なシチリアの若い貴族で、権力に取り憑かれ深夜の墓場で鹿に乗って現れた悪魔（διάβολος）と取引して魔力を手に入れる。石木を金に変え詐欺取引をし、女達を誘惑しては破滅させ、ビザンツ宮廷から派遣された捕縛者を愚弄し、何度も処刑にされかけては寸前に魔力で逃亡する。ここだけ読めばまるで悪漢小説だが、実際は聖者伝を集めた『天国 *Παράδεισος*』（1641 年）の「カターニャの聖レオン伝」の一節である。教会に押し入り冒瀆を続ける魔術師は、最後に聖者に捕えられ火刑に処せられる。聖者自身も火の中に歩み入るが、

傷ひとつ負わない。魔術師はより高次の能力を持つ聖者の引き立て役にすぎないのである。

三つ目の作品は、世紀変わって**アンゲロス・フリストフォロス**（Άγγελος Χριστόφορος, 1575-1638）の「**悪魔に憑かれたキリスト教徒** *Χριστιανός δαιμονιζόμενος*」。『今日のギリシャ人の状況についての手引書 *Εγχειρίδιον περί της καταστάσεως των σήμερον ευρισκομένων Ελλήνων*』（1619年）からの抜粋である。ペロポネソスのガストゥニ村出身の僧侶でアテネに出てきた際、トルコ官憲に逮捕され拷問される。後に、英国へ逃れケンブリッジ、後オックスフォードで研究生活を送り当地で没した。四冊の著作を出版し、当時のギリシャの現状を英国に伝えた最初の人とされる。

この箇所では作者がギリシャで見聞した悪魔払いの様子が綴られる。悪魔に憑かれた男（δαιμονιζόμενος）が僧院に連れて来られる。鉄鎖で柱に縛り付けられた男の前で、僧達が三日かけて交代で四冊の福音書を朗読。男は神を罵り冒瀆し続けるが、仕上げに大バシレイオスの悪魔祓い（εξορκισμοί）が読まれると、悪霊は退散し男は元の善良な人間に戻る。

いずれも奇蹟・魔力の物語ではあるが、語られる世界は中世の物語の継続のごとき等質な内部構造を持っている。この世界内でなら驚異ではあれ、失われた視覚も回復し、実在する悪魔も福音書の言葉で退散する。黒魔術を揮う不敬なる魔術師も奇蹟の能力を持つ聖者に滅ぼされる。そこには異郷から到来した現実を脅かすような恐怖はなく、人々に望まれた驚異の事跡があるのみである。書き手の想像力・創造力によって読む人を動かそうと言うのではなく、神の恩寵を宣伝する、あるいは故国の惨状を伝える、といった目的に奉仕している。

ただ、語り手（つまり作者自身）は、奇蹟譚が読み手を十分に説得できるか不安を感じているようで、敢えて、「この者が目を刳り抜かれ、その後傷一つ無い健康な目で町を跳び歩くのを我々は自身の目で見た」（ヌキオス、I p.213）、「三十五年前にこの目で見た...私自身がその場に居合わせた」（フリストフォロス、I p.303）との文言を滑り込ませ、内容の真実性を保証しようと試みている。幻想小説ならば、もう少し巧みな手段で作者が出来事の信憑性を操作するところだが、それはもっと先の時代の話である。

5. ギリシャ啓蒙期

18 世紀後半のフランスで啓蒙主義・自由思想に触れ、自民族の将来について憂えていたのが**アダマンディオス・コライス** (Αδαμάντιος Κοραΐς, 1748-1833) である。スミルナの生まれで、34 歳で医学を学びにモンペリエへ赴き、1788 年革命直前のパリに移って元々興味のあった文献学へと進んだ。古代作品を校訂し 25 巻を超す浩瀚な「ギリシャ叢書 *Ελληνική βιβλιοθήκη*」を刊行した。書斎の学者のイメージがあるが、情熱的な愛国主義者で、1800 年前後に匿名でいくつかの政治パンフレット（「エジプトで自由のために戦ったギリシャ人の軍歌 *Άσμα πολεμιστήριον των εν Αιγύπτω περί ελευθερίας μαχομένων Γραικών*」、「軍隊の喇叭 *Σάλπισμα πολεμιστήριον*」など）を発行し、祖国独立のため同胞への激励と外国への援助を熱狂的に呼び掛けている。「ギリシャ叢書」も、祖国独立のためには過去の文化遺産の教育が必要との思いから始まった企画だった。

その名は純正語 (*Καθαρεύουσα*) に結びついているけれども、元々は卑俗でも晦渋でもない、口語を骨格としながらも外来語の影響を浄化し、幾分古代語によって調整した言語が国語たるべし、といういわば中道 (*μεσή οδός*) 的なものだった。

古代への強い思い入れは「**冥界新聞** *Εφημερίς του Κάτω Κόσμου*」(1824 年) のような作品を残すことになる。独立戦争が勃発して三年目、メソロンギでは包囲戦が行われており、ギリシャ国家はいまだ対外的に承認されておらず、まさに民族が自由のために激闘する時期に書かれた。

冒頭はとり澄ました時事文調で始まる。「死者はもはや嘆くことはない、と人は皆押しなべて信じている。しかるに、次なる新聞の断片がラコニアのタイナロン岬、すなわち古代人がハデスへの入り口と考えた場所で発見された。(IV, p.79)」そこから人を喰ったような冥界からの新聞記事の引用が始まる。

冥界の園エリュシオンでは地上のギリシャの現状を憂う先祖達が議論をしている。反マケドニア主義の弁論家デモステネスやその甥がフィリッポス、アレクサンドロス父子への遺恨を述べたて、ローマ、トルコを非難する。政治パンフレット「軍隊の喇叭」と同じ流れであり、征服者どもがギリシャの末裔を悲惨な目にあわせたというわけである。最後に、外国語に汚されてしまった現在の言語の批判が展開する。「あなたがたのうち誰が地上から降りてくるアテナイ人の言葉をいまでも理解できようか。あの者たちの大部分はアルバニア語を話しておる。我々のうちのドリス族の者はペロポネソスの言葉はもちろん、ケルキラやザキンソスの言葉など一層理解不能だ。ギリシャ語を三語話せば、イタリア語を十語も混ぜて喋るのだから。イオニア族はイオニアから降りてくる者たちの話が何

語やらわからず途方に暮れ、ホメロスもヘロドトスも（最近）死んだキオス人やスミルナ人の使うトルコ語語彙に手を焼いている！（IV,p.82）」つまり外国訛りの言語は「浄化」せねば、となるのである。こうして、登場人物の口を借りて作者自身の言語観が直截的に披瀝されている。

編者パノリオスは「現代ギリシャ幻想文学の嚆矢の一つ」（IV p.10）と述べているが、先行する後ビザンツ期の奇蹟・驚異・畏怖に続き、現代ギリシャ文学における幻想は、現実社会の諷刺の姿で登場したということになる。しかも一般的な世界の状況ではなく、自身が（あるいは自民族が）その瞬間に直面している政治社会にかかわる問題を揶揄している。

6. エプタニサ派

宗教的・民族的啓蒙という目的を越え、様々な人間的感情・美意識を表現しようとする現代的な意味での文学活動は、まず、西方のエプタニサ諸島から起こった。筆頭に挙げられるべきは**ディオニシオス・ソロモス**（Διονύσιος Σολωμός, 1798-1857）である。が、25歳の作品「自由への賛歌」によって国民詩人に位置づけられるものの、生前刊行した作品は僅かであり、多くが断片的な性格を有する。しかも散文作品は二篇を数えるのみで、『幻想短編』に採られた**「ザキンソスの女 Η Γυναίκα της Ζάκυνθος」**はその一つ。トルコ軍による第二次メソロンギ包囲戦（1826年）を機に書き始められ何度か推敲されたが完成しなかった。しかも、不完全ながらも出版されたのは二十世紀になってからである。残された断片的な形では、その評価は容易でない²⁾。元々は特定の女性を諷刺していたらしいが、「遙かに宇宙的な広がりを持ち、悲嘆と予言、ないし悪夢的なものになっている³⁾」。

語り手の僧ディオニシオスが井戸端で休息し、この世の邪悪なる者の数の多さに愕然としていると、井戸から哄笑が聞こえ角が覗く。ここで僧はザキンソス島の邪悪なる女のことを思い出す。ここから「悪」を象徴する女主人公の容貌の醜悪さが、身の丈から身体部位（顎・目・口）にわたって細かく語られ、続いて、素行の悪辣さが描かれていく。女はメソロンギ難民たちが革命戦士たちのために施しを請うのを邪険に追い払うが、その様子は実にリアルに描写されている。対岸のメソロンギからはトルコ軍の砲声が聞こえている。蠟燭を捧げ無事を祈る老婆の姿を見るうち、語り手はリラを抱えて空を飛ぶ女神を、さらにメソロンギで戦う同胞の姿を幻視する。ディオニシオスは物語の登場人物であると同時に、全能の語り手の役割を負っており、その後突然、女主人公の部屋の「鏡の裏」

に入り込む。穢らわしいベッドに寝る女は傍らの棺を見て恐れ、鏡の前で踊り狂い、忌まわしい自分の映像を見て罵り、ついには縊死する。最後に、構想メモのような二章が付けられ、語り手は再び登場人物となって、ザキンソスの女に憎しみを抱く者たちを宥める。

現実と幻想が交錯し、非常にリアルな島の風俗描写の中に、現実ではあり得ない「悪」が描かれる。「自然と超自然の場面が共存⁴⁾」、「極限的なリアリズムが幻視的・超現実的要素と組織的に結びついている⁵⁾」。この点ではまさに幻想文学の一つと言えるが、虚構の小説ではなく同時代の現実と直結している。個人的あるいは抽象的な「悪」というだけではなく、民族の桎梏としての圧制者を象徴するものとして主人公は提示されているのである。

ケルキラ島出身の**ヤコヴォス・ポリラス** (Ιάκωβος Πολυλάς, 1825-96) はソロモスの弟子にして、1859年初めて師の「全集」を編纂出版、その後のソロモス研究の基礎を築いた批評家である。ドイツ文学に通じる一方、初めてシェークスピアのギリシャ語訳を著わした。彼も短編作品は僅か三篇しか残していない。「**三枚の金貨** *Τα τρία φλωριά*」(1892年)はその一つである。

宝の山を守護する幽霊(φάντασμα)と取引をした父親の娘婿捜し、及び、婿となる若者と実父の再会が物語の軸となる。冒頭はアンドニスと妻が結婚に無関心な娘フロシニを心配する会話から始まり、(後に述べる)「風俗小説」の趣きを持っている。時間は遡り、一年前流浪の占い女がフロシニに一族の秘史、三枚の金貨の由来を明かす。アンドニスに連れられた花婿候補のミハリスが村へ向かう途中で語る生い立ち(かつて使えた主人のことを含む)には後半部分への繋がりが隠されている。約束通り幽霊と金貨を交換し、前半が終了。十年後村で幸せに暮すミハリスの許へ、黒衣の男(かつての主人)がやってくる。互いの告白から、ギリシャ文学お馴染みの「再会」の場面となり、「フロシニ、義父さんの手を握っておくれ」の言葉で幕引きとなる。この後半でも、人物それぞれのエピソードが拡張され、ミハリスには許嫁フロシニを掠奪に来たゴロツキと対決し殺害した過去がある。父の方は、実はかつて村を去ったフロシニの親族の一人であり(その歴史は冒頭の占い女によって語られていた)、イタリアの放浪生活、訳あって別れた実子捜しが明かされる。ミハリスの村へ導かれて来たのはイタリアで学んだ魔術により金貨を護る幽霊を召喚した結果だった。

標題の「三枚の金貨」は魔法の小道具として使われ、幻想的な彩りを添えてはいる。が、金貨にしろ幽霊にしろ道具立てに止まっており、異なる世界へ繋がっ

てはいないので、幻想小説と呼ぶのはためられる。作者は語り手と一体化しており、その語り口は民話風である。しかし民話というわけでもない。様々な人物のエピソードが埋め込まれ、プロットも時間通りの配列ではなく、伏線が張り巡らされている。小説としてそれなりに複雑な構成を持っているのである。発表の1892年と言えば、新アテネ派の「風俗小説」が興隆し始めた時期であり（「エスティア」誌主催短編小説コンテストは1883年、エフタリオティス『島の物語』1894年、カルカヴィツァス『舳先の言葉』1899年）、六十歳半ばを過ぎた批評の大家が新興の短編小説に挑戦したということだろうか⁶⁾。

コロクトロニス将軍回想録で知られる**ヨルギオス・テルツェティス**（Γεώργιος Τερτσέτης, 1800-74）は同郷のソロモスと親交があり、独立戦争に参戦している。陸軍学校歴史教師、裁判官として働いたが、1832年コロクトロニスの裁判を担当し、時の政権の圧力に反して有罪判決を拒否したため追放された。が、これを機に「モレアの老人」の知遇を得て、回想録を書かせることになる。十年後政情が変わると帰国し、国会図書館の館長を務めた。

「**フォトスの夢** *Ονειρο του Φώτου*」（1830年）はイピロス・スーリ地方の有力家門フォトス・ジャヴェラス（Φώτος Τζαβέλας）を主役とした革命期の挿話である。フォトスは一族を率いて、講和条約を踏みにじったヨアニナのアリ・パシヤに抵抗し、1803年スーリ陥落後はパルガからケルキラ島へ渡り、他のイピロスのクレフテスたちとともにロシア・フランス軍で軍務に務めた人物である。

本作はケルキラへ渡る直前アリ・パシヤ軍を逃れ洞窟で野営した際の夢を描いている。フォトスは夢の中で白衣の殉教者サムイル（トルコ軍相手にスーリの僧院に籠もり自爆）に連れられ、星々の間を通り抜け、甘き調べの木霊する天上界まで案内される。次に一転して地獄界へと向かい、身の毛もよだつ責めを受けている裏切り者たち（この時点では裏切りは発覚していない）を目にする。最後に、アリは講和条約を破るだろうという予言を受ける。目覚めたフォトスが行軍を続けると予言通り敵の猛攻撃に遭う。多勢の敵に観念しかけたときサムイルが炎の剣を携えて降り来たり、敵を打ち破る。予言の夢は幻想的な光景を描いているのだが、すぐ後に現実起きた奇蹟譚が続く。物語中で夢と奇蹟が同一地平上に併置されているのである。

エプタニサ派は詩が優勢である中で、散文作家として名を残すのがケファロニア島出身**アンドレアス・ラスカラトス**（Ανδρέας Λασκαράτος, 1811-1901）。その

性激烈なモラリストで、島の旧弊な社会を激しく糾弾した「ケファロニアの秘密 *Τα μυστήρια της Κεφαλονιάς*」(1856 年)により破門を宣告された。一時期英国に逃れながらも、社会風刺の作品を生涯書き続けた。ソロモスの知己であると同時に、後の新アテネ派の作家たちと繋がりを持つ人でもある。

「木星への旅 *Ταξίδι στον Πλανήτη Δία*」(1887-88 年)は、夜の砂浜で星を見上げていた「私」が巨大な星に魅惑され、太陽から伸びる光をつかんで飛んでいく、という SF 仕立ての作品であるが、木星人と昆虫のように採集された地球人との宗教問答を通じて、当時のギリシャ社会を諷刺する一点に狙いが絞られている。木星では人も草木もただ巨大だと述べるだけで、異世界の情景は描写されず、奇抜な設定を活かそうとはしない。じきにヨアニナが奪還できると意気込む地球人に対し、そんなちっぽけな場所知らない、とつれない木星人の返事が笑いを誘う(ヨアニナは当時まだオスマン領だった。)

この作品を含む『驢馬の物語 *Ιστορία ενός Γαϊδάρον*』は、他にも驢馬、操り人形、彫像、オランウータン、七面鳥などが語り役を務める奇想短編集であるが、諷刺が過ぎて語りの面白さが置き去りにされることが少なくない。その中で面白いのは、主人公が冒頭すぐに戦死して髑髏になるがその後も自身の波乱の運命を語り続ける「頭蓋骨の語る話 *Ιστορία μιας Κάρας*」やイコンの聖母像が墮落した聖職者の悪漢ぶりを告発する「悪魔神父 *Ο Παπά-Διάολος*」だろう。誤って棺桶に納められた女が会葬者たちの身勝手な会話に腹を立てるという「死せる女の話 *Ιστορία μιας Αποθαμένης*」は、E.A.ポオの「早まった埋葬」(1844 年)風だが、神経症的な恐怖の描写などではなく、奇抜な設定で賤しい人性を笑いとはばそうという狙いが剥き出しになっている。

編者パノリオスは明らかに SF を幻想文学の範疇に入れており、異星人と出逢う「木星への旅」を採用したのだろう。ただし、他の短編作品と同様、種々の設定を利用しながら現実社会の矛盾を痛烈に風刺する狙いははっきりしており、作者の関心は異世界そのものには全く向かわない⁷⁾。

詩は『幻想短編』の対象外だが、エプタニサ派の**アリストテリス・ヴァラオリティス**(Αριστοτέλης Βαλαωρίτης, 1824-1879)の歴史詩「**サナシス・ヴァギヤス** *Θανάσης Βάγιας*」(1867 年)に言及しておきたい。そこに盛られたギリシャ土着の幻想の素材は、他の様々な作品にも流れ込むことになるからである。

ヴァラオリティスはレフカダ島生まれで、民衆語により詩を綴った点ではまぎれもなくこの派に属するのだが、少し毛色の変った人で、そのテーマは多く

革命の歴史を歌っており、むしろアテネ浪漫派に近いとされる。

アリ・パシャの廷臣だった題名の実在人物が梟と死者たちによって墓の中から蘇り、アリの王宮へと連れて行かれる。途中密かに逃れ愛しい妻に会いに戻るが、変わり果てた姿に妻は怯えるばかり。抱きしめようとした夫は相手の手に握られた護符を目にして消えさる。生ける屍の悲惨な様（「なぜあなたは青白く、土の匂いがするの...蛆があなたの顔を喰らい」 Δ', 15-18）や、死者たちがサナシスを掘り返すおぞましい様子（「死者どもは猛り狂って喚きたて、私に跳びかかっては、爪で口で、黒き地面を掘りたてる」 E', 17-20）が描かれるが、全体は夫婦の対話で構成され、生者に受け入れてもらえない哀れみが作品の基調となっている。梟は不気味な鳴き声から不吉な鳥の代表格であるが⁸⁾、この作品では脚韻を踏むためにも登場する（κουκουβάγια / Θανάση Βάγια）。

この第四連には特別に「吸血鬼 *Ο Βρυκόλακας*」の章題がつけられ、全体の枠物語（妻が雪の中で宿を借りた母子に、墓から蘇った夫の話を語る）に埋め込まれているのだが、死者が墓の中から蘇るこの「吸血鬼」の話こそ、ギリシャの民話や民謡に見られる土着のモチーフであり、外来のものではない民族独自の幻想恐怖の素材となってきた。ヴァラオリティスはこれを巧みに歴史詩に利用したのである。（「吸血鬼」については第9節で詳しく述べたい。）

7. アテネ浪漫派

1830 年新生ギリシャ王国の首都となったアテネで、エプタニサに続く文学運動が展開した。表現手段として採用されたコライスの純正語は、しかし次第に古風晦渋になって行く。この派では恋愛や歴史を滔々と歌い上げる詩が主流であり、長編小説も現われた。他方、短編小説はいまだ発達せず、『幻想短編』には**パナイヨティス・スツオス**（Παναγιώτης Σούτσος, 1806-1868）の「**ギリシャ革命の亡霊** *Το φάντασμα του Ελληνικού αγώνος*」（1843 年）が採られているだけである。スツオスはコンスタンチノーブルの上流層ファナリオティスの出身であり、兄アレクサンドロスとともにアテネ浪漫派の代表格。この派の開幕を告げる対話体の恋愛詩「オディポロス（旅人）*Ο Οδοιπόρος*」（1831 年）、現代ギリシャ初の（書簡体）長編小説「レアンドロス *Ο Λέανδρος*」（1834 年）を著わし、まさにこの派の象徴であった。

「ギリシャ革命の亡霊」は 3 月 25 日の革命記念日を前に、語り手がアクロポリスを訪れた後ピレアスへ下っていき、革命戦士カライスカキスの墓前で目にする幻視譚である。大敗北となったアクロポリスの戦いから時を経て、当時は記

念塚が作られたものの、続く政権は斃れた戦士達に冷淡であり、今では髑髏が野晒しにされ野犬に囓られる有様。月明かりの下で（洪水伝説の）デウカリオンの石の巨人のごとく地面から湧き出たキュダヒ將軍率いるトルコ軍とギリシャ軍がかつての戦いを再現する。スーリ出身の英雄たちは多勢を相手に善戦するが、一人また一人と斃れていく。屍が満ち溢れ静けさが戻った戦野にかつての朋友ヨアニス・ノタラス（1805-27。コリントス部隊を率い、アクロポリスで戦死）の亡霊が現れ語り手に近づく。自分たちの苦難はいまだ終わらず飢え続けているのに、今の人間は過去を忘却してしまった、と亡霊は訴える。そのうち周囲の荒ら屋から陸続と現れ物乞いに出かける貧民達の姿と交錯しながら幻視は終わる。

発表されたのは1843年であり、アクロポリス包囲戦（1826-27年）の17年後であるが、作中では髑髏が晒されて七年の夏冬が過ぎ、とある。スツォスは幼少期ドナウのワラキア公国で育ち、後パリ（コライスにも会っている）やイタリアに数年滞在しているが、1825年にはギリシャに帰国している。したがって、これらの戦争や戦士たちのことは身近で聞き知っており、19歳の青年の感受性に深い影響を刻みつけたことだろう。作品の語り手はすなわち筆者自身であり、実際に勇者達の髑髏を見ながら幻視に耽っている。作品の最後で執筆の狙いが明らかになる。記念日を機に、祖国の自由独立のために斃れた英霊にもっと敬意を払うべし。「フォトスの夢」が未来の予言であったのに対し、こちらは過去の戦いの幻視を通じて同時代の読者に訴えかけているのである。月下の幽玄な幻想を描いてはいるが、内容も執筆意図も同時代の現実に関結している。

アテネ浪漫派はパナイヨティス・スツォスに始まりアヒレフス・パラスホスに終わるとされるが、『幻想短編』ではパラスホスの意外な作品に出逢う。この作品は第9節で扱う。

文学史の中で、アテネ浪漫派とこれに続く新アテネ派を繋ぐ存在として特異な位置を占めるのが、**エマヌイル・ロイディス**（Εμμανουήλ Ροΐδης, 1836-1904）である。代表作は中世史に仮託してカトリックを諷刺した長編「女教皇ヨアナ *Η Πάπισσα Ιωάννα*」（1866年）であるが（これによりラスカラトス同様に破門された）、文芸批評分野での功績が大きい。芸術には才能よりもこれを育てる適切な環境が必要として、同時代の詩人を痛烈に批判した。民衆語派を支持しながらも純正語で執筆するという不思議な態度を取るが、「**ミリヤ** *Η Μηλιά*」（1895年）は

そんな作家が「アクロポリス」紙のクリスマス版に寄せた唯一の民衆語作品である。民衆語でも文学表現できることを批判者たちに見せつけようとしたのかも知れない（Δημαράς, 1987:379）。

「林檎の木（μηλιά）」の下で生まれ、かく名付けられた純真な少女が主人公の民話である。ミリヤは鳥と話す能力があり、人生に倦いた憂鬱な王様を楽しませれば国の半分をもらえるという試合に参加する。大道芸人、錬金術師、科学者が順に技を披露するが王は興味を示さず、三人目には怒りだす始末。科学者は太陽を瓶の中に閉じ込めるのに成功したアメリカ人（エジソンを当てこすっているのだろう）なのだが、王の怒りの理由が振るっている。曰く、オリーブ油が王国の経済を支えているのに、そんな発明品を我が国に持ちこんで領民の暮らしの糧を奪う気か！最後に真打ちミリヤが登場し、鳥たちと一緒に優艶なダンスを披露、みごと王を楽しませて王妃になる。

ロイディスは五歳から八年間ジェノヴァで過ごしているが、その頃にイタリアで聞いた話を書き留めた、と最後に記されている。子供向きのお伽噺とは言え、結末にはこの作者らしい諷刺の一撃が待っている。「老母には経済大臣の地位を与えましたが、老父は高齢で力仕事ができず、文字も読めなかったので困ってしまいました。けれども、ちょうど教育大臣が亡くなったのでその地位に据えしました。以来多くの場所で教育省にはもっとも無学のものが居座るという習慣が生まれ、今も続いています。（IV, p.153）」とは言え、この寓意を最終の狙いとして作られているとも思えず、全体は作者らしい皮肉を効かせたクリスマスの読み物といった体である。

ポオやボードレールの翻訳があり、幻想文学の流れにも興味はあったのだろう。が、愛犬が残酷な医学生に虐待を受ける「ある犬の物語 *Ιστορία ενός σκύλου*」（1893 年）、野良犬と露天商が歩道の主導権を争う「硝子商 *Τα ναλοπωλεία*」（1898 年）、故郷シロス島での幼年期の悪戯を描く「栓抜き *ξεστούπωμα*」（1898 年）、誕生日の祝辞を述べるための準備の大騒動と本番での失敗で笑いを誘う「父へのお祝い *Η εορτή του πατρός μου*」（1895 年）といった、短編作品やエッセイを見る限り、その本領はユーモアと風刺をたっぷり含んだ、リアリズムが基調の作品にあると思われる。

8. 新アテネ派

19 世紀の後半になると、理想化された愛や死を剥き出しの感情で謳い上げる浪漫派の長編小説に代わって、同時代の農村漁村の庶民の生活（後には都市の生

活)をリアルに描出しようとする短編小説が興隆してくる。用いられる言語も民衆語が次第に優勢になっていく。「ギリシャ民俗学の父」N.ポリティスに代表されるフォークロア研究もこの流れを推進した。これらの風俗小説(ηθογραφία)を多量に産出するのは1880年代から頭角を現わす「新アテネ派」と呼ばれる若い文学者の世代だった。

民衆語派の最右翼**ヤニス・プシハリス**(Γιάννης Ψυχάρης, 1854 - 1929)は、「昔々 Μια φορά κι έναν καιρό...」で始まる文字通り民話風掌編「**天上の聖堂番** Ο **καντηλανάφτης τ'ουρανού**」(1911年)が『幻想短編』に採られている。

貧しく両親からも疎んじられている哀れな少年が戸外で嘆いていると、ある老人が現れ、自分は夜天上の星々に火を灯す聖堂番だと告げる。遠い世界に連れ去ってほしいと願う少年を押しとどめ、誤って壊してしまった星の欠片を代わりに与える。かくして人の温もりが沁み入った少年の心には将来への希望が灯る。少年は後に偉大な詩人になった。

編者パノリオスは、単なる伝統的な民話を越え、「ファンタジー(φάνταζι)」作品になっているとする(IV, p.12)。民衆語派の牙城だった雑誌「ヌマス(Νουμάς)」に掲載されたことから察せられるように、ただのお伽噺ではありえない。最後の部分には文学の未来に託す寓意が込められているのだろうか。幻想文学という点から見ると、途中で一箇所だけ作者が現れて挿入する「その後起きたことから判断すると、力のある善良な老人だったと私たちは思う」が現実に戻し幻想味を減じさせているのだが。

二百を超える短編を残し「ギリシャ短編小説の父」とされ、この時期の散文作家を代表するのが**アレクサンドロス・パパディアマンティス**(Αλέξανδρος Παπαδιαμάντης, 1851-1911)である。宗教色の濃厚なスキアソス島で神父の子に生まれ、アテネに出て翻訳・新聞投稿などで暮らし、やがてクリスマスや復活祭を描いた短編で認められるが、後には島に戻りそこで執筆した。

短編小説を書く際、田舎の不思議な言い伝えをそのまま流しこめば、自ずと幻想的な調べが濃厚となる。「岸辺の花 *Άνθος του γιαιού*」(1906年)では、波間に漂う神秘的な光の由来が語られるが、それが見えるのは語り手自身が幻視者だからであると明かされる。「見晴らし *Τ'αγνάντεμα*」(1899年)では絶望から岩に変えてもらった船乗りの妻の伝説がそのまま語られ、「海豹の悲歌 *Το μοιρολόγι της φώκιας*」(1908年)では海で溺れた憐れな少女のために海豹たちが悲歌を歌

う。とは言え、いくつかの方向性が同じ作家に同居しており、最初の短編「聖誕祭の麵麴 *To χριστόψωμο*⁹⁾」(1887 年) はすでに社会問題へのリアルな視点を含んでいるし、「ココナの家 *Της Κοκώνας το σπίτι*」(1893 年) のように、幽霊屋敷に住まう吸血鬼と思わせて最後に引っ繰り返すユーモア作もある。

『幻想短編』所収の「高貴なる榿の木の下で *Υπό την βασιλικήν δρυν*」(1901 年) は、木に対する語り手「私」の愛を描いた神秘的な物語。少年の頃「私」は田舎の復活祭に参加するため驢馬に乗って山道を登る途中、一本の壮麗な榿の木(δρυν)に魅せられる。典礼を抜け出し、榿の下で、赤いヒナゲシに囲まれて眠るうち木は少女に変容し、自分は不死のニンフではない、切り倒さないよう、さもないと望まぬ悪をなしてしまうから、と懇願する。数年後再び訪れた際すでに木はない。糸紡ぎの老婆が、木を切り倒した男の変死を告げる。「木には霊が取り憑いていた(στοιχειωμένο)。(I, p. 224)」

この作品については、佐藤(1995)が詳細に論じている。様々な研究者の解釈を検討し、低地にあるキリスト教社会(作中では典礼がおこなわれている教会)に対して、榿は少年の空想につながる「異界」を象徴する、という説を提示している(p.33)。確かに、語り手にとって、いるべき場所を自らの意志で逃れ、迷った森の中を導いてくれる巨木は畏怖にして魅惑の対象である。類似の設定の「流れの悪魔 *Τα Δαιμόνια στο ρέμα*」(1889 年)でも、典礼を勝手に抜けだした「私」が何年も前に死んだはずの白髭の隠者に出会い叱責を受ける。しかし、榿の木であれ、過去の隠者であれ、作品内では現実世界と同一地平上の異種の区域、という印象を受ける。全てが作者の分身たる語り手の、虚実分かち難い少年期の回想の枠に納まっており、読者には禁断の異教界もキリスト教の現実界も地続きに見える。作者は慄然たる異世界といったものを読者に信じ込ませようとはしていない。最後の老婆の説明は、魔力を持つという榿の言葉(「望まぬ悪をなさないよう」)を、別の語り手によって補強する試みかもしれないが、いささか取ってつけたようではある。

同じく木に取り憑いた魔物を扱うカルカヴィツァス「悪霊」と比べると、超自然要素の提示の仕方に違いがあることが明らかになる。この点は以下でさらに論じることにした。

パパディアマンディスの従兄弟**アレクサンドロス・モライティディス**(Αλέξανδρος Μωραϊτίδης, 1850-1929)も作家で、復活祭の行列の一齣「門を開けよ *«Άρατε πύλας...»*」(1891 年)や暴風に襲われた島民達が一心に祈願する「祈りの

時 *Σε μια παράκλησι*」(1902 年) など島の素朴な生活を多くの作品に描いている。

『幻想短編』の「**クキツァ** *Κουκίτσα*」(1907 年) の主人公は村のコノモス神父。幼くして亡くした娘クキツァを偲び、神父は夜ごと寂れた教会で過ごす悲しみは消えない。家では時に影が横切ったように感じ話しかける。この古ぼけた教会はなぜか小奇麗に片付けられ、神父の独り言も止まないの、怪しんだ村人たちはクキツァが吸血鬼になった (*βρυκολάκισεν*) と噂しあう。娘の純潔が侮辱された神父は苦しむが、教会を片付けていたのはある隠者だと分かったら、神父はむしろ落胆し、たとえ吸血鬼であっても娘に会いたいという切に願う。最後に白い衣装の乙女が現れ、知人の羊飼いに必死に止められるも神父は歓喜のあまり抱きしめようとする。亡霊は万物を讃えた後消え去る。

この作品で前面に出ているのは亡き娘への慈愛、哀悼である。亡霊に恐怖、嫌悪感しか抱かず、神父を「吸血鬼の父 (*ο πατέρας του βρυκόλακα*)」と忌み嫌う村人や羊飼いと対照的に、いかなる姿であれ亡き人に今一度会いたいと主人公は願う。それぞれの感情の違いはあるものの、登場人物たちは等質の世界に属しており、もの悲しい妖精譚という印象を与える。

パパディアマンディスと双璧をなす風俗小説の書き手と言えば**アンドレアス・カルカヴィツァス** (*Ανδρέας Καρκαβίτσας*, 1865-1922) である。本職は船医、軍医であり、科学・理性的な視点を持つ人といえる。作品の多くはその経歴から着想を得ている。長編作「乞食 *Ο ζητιάνος*」(1896 年) により、ギリシャにゾラの「自然主義」を導入した人でもある。

「**黒珊瑚** *Το γιούσουρι*」は代表作の第二短編集『舳先の言葉 *Λόγια της πλώρης*』(1899 年) に収録されている。題名からも明かな通り、海や船に絡む短編ばかりを集めた作品集で、冒頭作「海 *Η θάλασσα*」は、海に憧れ船乗りになった「私」が引退後も海の生活を諦めきれない執心を語り、「海綿採り *Οι σφουγγαράδες*」ではこの職業に就くことを亡き父がきつく禁じていた理由が次第に明かされる、という具合である。

「黒珊瑚」は語り手「私」が幼いころ耳にした伝説の巨大な黒珊瑚を採りに行く話で、ヴォロス沖で探索の末に見つけた黒珊瑚との格闘は魔物との死闘の様相を帯びる。「私は斧をかまえゴツツ！最初の一撃を加えてやった。『大蛇』は目を覚ました。ただちに竜巻が、打撃が、災いが巻き起こり、あらゆる流れが私の上に注ぐかのよう。...引き剥がされぬよう、私は低い方へ移り根にしがみついた。すると突然、閉じていた瘤が漆黒の目のようにピカピカ光り、毒蛇が火を放つの

が見えた。白緑の枝には敢てそいつに挑んだ愚者どもの骸骨が剥き出しに垂れ下がり…骨がぶつかり合う音が響いた。… (I, p.116)」。

物語全体は、しかし、リアルに描かれる。そもそも「私」は黒珊瑚にたいした恐怖を感じておらず、対トルコ戦の勇者たちが海の生物ごときを怖がるのは恥だとさえ思い、島民の称賛を浴びるため捕獲に出かけるのである。苦闘の末見事に切り倒し船で曳航するが、途中網が破れ黒珊瑚は深淵に沈む。英雄になりそこねた「私」は今齢七十、あの格闘に思いを馳せる。描写の迫力からは、異世界の化け物か実在の巨大な生物なのか、分明ならざるところがあるのだが、「語り手」には、驚異とはいえ海の人生で出会った出来事の一つに過ぎない。

もっとストレートに超自然の怪異、例えば、悪魔、妖魔、怪異を扱った短編もある。同じ短編集には、奇蹟の水にまつわる「フリゲート船 *Οι φρεγάδες*」、不吉な梟と墓から蘇った兄の「凶兆 *Κακοσημαδιά*」、海の女妖「ゴルゴーナ *Η γοργόνα*¹⁰⁾」、船を襲う悪霊の群れ「悪鬼たち *τελώνια*」、分け前を渡すよう死霊が脅迫する「海賊たち *Οι κουρσάροι*」などがある。

このように、民話的な素材を取り扱いながらも、風景描写・心理分析を深めることでより小説たらしめるのが、カルカヴィツァスの真骨頂だが、「語り」を少しひねることで「幻想小説」としての効果を高めている場合が見られる。例えば、『背囊の物語 *Διηγήματα του γυλιού*』(1922 年死後出版) 所収の「悪霊 *Το Ζούδιο*¹¹⁾」(初出 1885 年) を取り上げてみよう¹²⁾。「高貴なる櫨の木の下で」と同じく、木に憑いた霊の物語であるが、パパディアマンディスとの違いがよく出ている。

冒頭はリアリズム調の語りで始まる。「昨十月のある日私は猟に出た。雨降りの後で地面は柔らかく、新しいふかふかの羊毛絨毯のように足がのめり込んだ。(p.65)」川のほとりで昼寝をしていると知り合いの田舎巡査 (*αγροφύλακας*) がやってくる。巡査は傍らのポプラの根元の穴と杭を指し、その由来を語り始める。

十年前、村の青年アンドニスは失恋の手酷い痛手から悪霊に取り憑かれる¹³⁾。教会で神父の声を聞くと、野獣のような唸りで教会のガラス窓を震わせ醜悪な冒涇のことばを喚き散らす。呼び出された悪魔払い師 (*Ζούδιαρης*) は悪魔の様子を説明する¹⁴⁾。それは手の平ほどの小さな悪鬼で、喧嘩や賭け事の場に現れ、誰かが飲んだり欠伸をする瞬間に身中に飛び込み血を吸るのだ、と。青年は全身の血を吸われるが、悪魔払い師は悪霊をポプラの樹まで追い詰め幹に串刺しにする。悪霊は燃える硫黄の臭いとともに消え去り、樹の根元が斧によって封印される。

この作品の怪奇性は、悪意ある霊が登場するという素材以外に、物語の虚構性を際立たせるための、「語り」の構成にあると思われる。

第一の語り手「私」が外枠となり、その中に第二の語り手「巡查」が登場する。ただ構造が複雑になるだけではない。「私」は「作者」とほとんど同一の存在であり、物事を理性的に判断するが、「巡查」は超自然の出来事をそのまま受け取る素朴な人物である。彼は怪談を始めるに際し、樹の下に平然と寝そべる「私」を、「あんたがた学者先生は何でも知ってると思ってなさるが...命を守れねえで学問がなんの役に立ってんだ。胡桃や栗の樹の深い陰の下に座っちゃいけないくらいのことはあんたより百姓の方がずっとよく知っとる。(p.67)」と詰る。妖精物語のように超自然の怪異を素朴にそのまま提示するのではなく、あるいは16、17世紀の作品のように「作者」が作品中に現れ出来事の信憑性を力説するのでもない。第一の語り手が物語を第二の語り手からの聞き書きの形で提示する。読者は理性的な「私」が迷信深い「巡查」の話から受けた戦慄を想像で補完しながら読み進める。「内容」に対し距離を置くこの態度こそ、「幻想小説」を成立せしめるものであろう。パパディアマンディスの場合は、語り手「私」が空想と現実の入り混じった自身の幼年期の思い出を直接語るが、その虚実性については何もコメントされず、「内容」は自明の事実になっている。最後に躊躇いがちに追加された老婆の話が、怪異の真実性に対する「語り手」の思いをわずかに垣間見せるに過ぎない。

カルカヴィツァス「悪霊」は「恐怖とのたわむれ」に一步近づいている。

9. 「吸血鬼」と風俗小説

世界の様々な地域に広がる吸血鬼伝説は、西欧では J.ポリドリ、T.ゴーチエ、J.S.レ・ファニュ、B.ストーカーといった作家達が様々な想像の衣装を纏わせることで近代の怪異に生まれ変わった。ギリシャにも土着のものとして中世以降“βρικόλακας”の伝説が伝わっている。先のヴァラオリティスの作品に現れた怪異である。

通常“vampire”と英訳され、仮に「吸血鬼」としておくが、西欧風の「生者の血を吸って永遠の若さを保つ死者たち(カイヨワ、1966:294)」、ましてや映画とともに広がった、闇を支配する貴族などといったイメージとはかけ離れている。

アテネ・アカデミーの『現代ギリシャ語史的辞典』“βρικόλακας”の項には比較的詳しい説明がある¹⁵⁾。

「罪を犯した者(αμαρτωλού ανθρώπου)の死体。朽ちることなく悪気に満ち、

通常夜（時に土曜以外の日中）墓から現れ、血の犠牲により、まず親しい者、さらには他の人々に害と破滅を惹き起す。生前と同じ生活を営み、女と交わって子供を作る。普通の人間の姿で、或いは犬、蛙など動物や、皮袋や火など物の姿でも現れる。刺殺された者、崖から転落死した者、死んで猫や鳥に跳び越えられた者なども吸血鬼になると信じられている。」

同辞書はいくつかの語源を挙げているが、最新のバビニオティス『現代ギリシャ語語源辞典』によれば、ブルガリア語由来であるらしい¹⁶⁾。古代語には用例がなく、クリアラス『中世民衆ギリシャ語辞典』は、セライの僧マルコスの「吸血鬼に関する論考」（時代不詳、写本は16世紀）と教会典礼の奇怪なパロディ「髭無男のミサ」（15世紀、印刷本は1553年）の用例を挙げている¹⁷⁾。

上のように、付随した様々な特徴があるが、「血の犠牲」とあるが必須ではなく、「夜、墓から現れ害をなす死者」「生ける死体」というのが肝心の点である。動き回る腐乱死体の「ゾンビ」のイメージとも違っており、むしろ腐敗しないまま生と死の狭間で彷徨い、生者と変わらぬ生活を送るとされている。

ギリシャでこのモチーフが人口に膾炙しているのは民謡「死せる兄弟の歌 *Tou νεκρού αδερφού*」を通じてであろう。この歌は数ある民謡の中でも、物語風の荒筋を持つ“*παραλογές*”と呼ばれるグループに属する。ギリシャの多くの地方に伝わるのみならず、バルカン半島の他民族にも広がっている¹⁸⁾。当然、人名・地名やストーリーの細部にも異同があるが、N.ポリティスが掲載した古典的な版のストーリーを紹介しておく（N.Γ. Πολίτης, repr.1975:138-41）。

妹アレティに遠国への縁談の話が持ち上がり、母親も八人の兄たちも反対するが、末弟コンスタンディノスだけは、万一のときは自分が妹を連れ帰ると誓い嫁がせる。やがて疫病が流行し兄弟はみな死んでしまう。母親が墓石の前で破約を呪うと、コンスタンディノスが墓から蘇り、黒馬で妹を連れ戻しに行く。教会の前でコンスタンディノスは姿を消し、アレティひとり、荒屋の母親と再会。歓喜の中で二人ともに息絶える¹⁹⁾。

ここに見られるのは邪悪な霊ではなく、生前の誓いを違えたため呪いにより蘇らざるを得ない死者の姿である。死者の風貌の戦慄は直接には語られず、道中小鳥たちが人声で（民謡によくあるモチーフ）「死者が乙女を連れて行くとは！」と驚き囁き合うのに続いて、兄妹の「兄さんはお香の匂いがするわ—昨夜神父が焚きすぎたんだよ」「金髪は、美髯はどうしたの—病気で抜け落ちてしまったんだ」というやり取りの中に臆気に描かれるのみである。そもそも恐怖を叩くテーマではなく、“*βρικόλακας*”の語もほとんど現れないのだが²⁰⁾、文学者たちはこの

モチーフを劇に仕立てた(A.エフタリオティス「吸血鬼 *Ο Βρικόλακας*」(1894年)、Φ.ポリティス「吸血鬼 *Ο Βρικόλακας*」(1908年)、Ζ.パパンドニウ「死者の誓い *Ο όρκος του πεθαμένου*」(1929年))²¹⁾。A.カルカヴィツァスは短編「凶兆」(1899年)の中に、アレティが死ぬのではなく鼻に変えられた話を織り込む。また、第一章のみで未完に終わった「アルマトロス *Ο Αρματολός*」(1906年)は幻想的な要素はないが、18世紀にトルコの圧政に抵抗し、妻を殺害した暴虐な敵将の喉笛を噛み切って以来「吸血鬼」の異名を得たフォキダの支配者が主人公である。ヴァラオリティスの描く墓の中から戦場に駆り出される死者やモライティディス「クキツァ」の蘇る死者については既に述べた。ポリラス「三つの金貨」でも、生き返って花に水を遣り祈祷をする村の神父が目撃され、恐れた村人（「神父は吸血鬼になった (*ο παππάς έγινε βρυκόλακας*)」I, p.250)が死体を焼き捨てに行く場面がある。

『幻想短編』収録作の中では、フリストス・フリストヴァシリスやコスタス・パサヤニスなどの1880年代の風俗小説作家がこのテーマを扱っている。彼らは小説の舞台として好んで自身の故郷を選び、地元の伝説を取り込むのである。

フリストス・フリストヴァシリス (Χρήστος Χρηστοβασίλης, 1861-1937) はいまだオスマン領だったイピロス近郊の出身で、独立運動に身を投じ、トルコ官憲に何度も逮捕された。後にアテネで文学活動を行ったが、バルカン戦争の結果イピロスが独立すると故郷に戻り、新聞発行者、議員として政治活動を行った。生活のため故郷を離れて出稼ぎに行かざるを得ない人々を描く短編集『異国暮らしの物語 *Διηγήματα της ξενιτειάς*』(1899年)が代表作。

「**朽ちざる女 *Η άλνωτη***」(1907-8年)は、村の男たちを誑かし、女たちに恐れられていた魔女(*μάγισσα*)が死んで三年目に、妹が骨を持ち帰るため村を訪れるのが発端。亡くなった時も遺体を石油で焼くのだ、教会に入れないうのだ、あるいは遠方に埋めるなどの案が出て大騒ぎになり、結局墓に埋葬となったものの、途中待ち伏せの女たちに石を投げられたという過去がある。妹と神父は遺体を掘り起こすが朽ちておらず、二人は恐怖で逃げ出し、村中がパニックになる「吸血鬼!」「朽ちざる女!」と。その後ヨアニナからの主教が悪魔払い(*εξορκισμός*)を行い埋葬しなすと、三年後には死体は朽ちていた。

ここでは正当な信仰に従わず共同体から弾き出された者が、墓の中で朽ちず、「吸血鬼」になっている。主題は「吸血鬼」の行う忌まわしい悪行ではなく、これをめぐって村に恐慌が広がる様を描き出すことにある。

破門されると埋葬されても朽ちないという信仰は、少し後の作品であるが、同じくヨアニナ出身の**コンスタンディノス・カザンジス** (Κωνσταντίνος Καζαντζής, 1864-1926) **「破門された者の墓** *Το μνήμα του αφορεσμένου*」 (1926 年) にも出てくる。破門された者は腐敗せず、永遠に母なる大地に抱かれることがない。かくして「吸血鬼」になる。

コスタス・パサヤニス (Κώστας Πασαγιάννης, 1872 – 1933) はペロポネソス南部のメシニア県生まれで、弟も詩人。職業は判事だったが、若い時分から文学に惹かれ、四十歳で法曹界から引退後、ジャーナリストとして「アクロポリス」紙などに投稿した。熱心な民衆語支持者であり、「教育協会 Εκπαιδευτικός Όμιλος」 (1910 年) 創設者の一人。ニコラオス・ポリティスの「ギリシャ民俗学協会 Ελληνική Λαογραφική Εταιρεία」 (1909 年) メンバーとして、マニの挽歌やセルビアの民謡などの著作も著わした。

「吸血鬼 *Ο Βρυκόλακας*」はもともと、(父親の故郷でもあった) マニ地方の民話や伝説を小説に仕立てた短編集『芳香 *Μοσκιές*』 (1898 年) 所収の作品である。非情な犯罪者が我が子を雪の中に見捨てる「殺人者の愛 *Η αγάπη του φονιά*」や離れて暮す母子の民話がトルコ人支配者の戦慄の行為で幕を閉じる「屠られしもの *Το Σφαχτό*」など人間心理の残酷さを描いたものもあるのだが、その中にあって、「吸血鬼」は超自然の怪奇をストレートに取り扱っている。

剛胆さを自慢する男が村はずれに残る城で一夜を過ごす、中庭の無花果の木の下で倒れているのが見つかる。身体は温かいのに息を吹き返さない。神父は悪霊にやられた男が「吸血鬼」にならないように (μη λάχη και βρυκολακιάσει) 埋めなければならないと告げる。四十日目には男は墓から蘇り、虫喰いの崩れた顔で家を訪れ妻に恨み言を告げて去っていく。古城や無花果にとり憑いているのは「幽霊」(στοιχειό)、「魔物」(αερικά)、「悪霊」(τελώνια) であり、慢心の過ちを犯したため、まっとうに死にきれない人間が「吸血鬼」なのである。吸血行為は描かれず、死者は床にぶちまけた腸詰を掠って姿を消す。「今では吸血鬼の一族は絶えて久しい。...あれ以来、(床の) 脂の跡は消えず残ったまま! (I, pp.238-9)」というのがオチになっている。

『幻想短編』は作品優先なので、意外な作品も選ばれている。時代は遡るが、最後のアテネ浪漫派詩人とされる**アヒレフス・パラスホス** (Αχιλλεύς Παράσχος, 1838-1895) **「吸血鬼の息子** *Ο γιός του βρυκόλακα*」 (1933 年死後出版) にここで

触れておきたい。当時は絶大な人気を誇った流行詩人であり、ロイディスやパラマスからも絶賛され、葬儀には国王ヨルギオス一世も列席した。祖国、愛、死を滔滔と歌い上げるのが本領だが、「吸血鬼の息子」はアテネとデルフィの中間の町リヴァディアの老婆から聞いたという民話である。編者パノリオス自身、このギリシャ産のゴシック・ホラーを「発掘」できたことに興奮している (II. p.9)。

ある夜産婆が陰気な男に呼び出され洞窟で子供を取り上げる。床の母親の話では、男は吸血鬼であり、自分を攫って子供を産ませたのである。男は赤児とお互いの血を啜りあう (ただしコリヴァ《κόλλυβα, 葬式の参列者に配られる菓子》も貪り喰っているが)。産婆は恐怖に駆られて逃げだし、一晚森を彷徨って家に辿りつく。一年後家の引き出しに吸血鬼の子供の顔が刻まれた金貨が見つかる。数年間贈り物は続くが、ある年、顔が消え、産婆も死んでしまう。

フリストヴァシリス「朽ちざる女」やパサヤニス「吸血鬼」では、生前の素行に問題がある不敬な人物が死後腐敗しなかったり、生ける屍として蘇ったのであり、信仰が基盤となる世界ではやむを得なしという設定だった。ところが、「吸血鬼の息子」での怪異は最初からそのようなものとして存在している。何故そうなったかという説明はなく、そもそも人とは隔絶した存在であり、当然より強い恐怖を惹き起す。遠国の母を慰めるため墓場から蘇った孝行息子などではない。異次元の存在が突如この世に侵入して来ているのである。どこまでが民話の素材に沿い、どこまでが創作なのか分からないが、浪漫派最後の詩人の作品に幻想怪奇小説の種が芽生えているかのようだ。

以上の吸血鬼とは全く違った角度から死なざる男を描いたのが**ザハリアス・パパンドニウ** (Ζαχαρίας Παπαντωνίου, 1877-1940) の「**パノス・クララス** *Ο Πάνος ο Κλαράς*」(1905 年) である。パパンドニウは独立革命以来抵抗運動の一中心だった山間部カルペニシの出身。アテネ大医学部に入学したものの、学生時代から文学志望で、16 歳で「アクロポリス」紙に投稿している。熱心な民衆語支持者で、散文「高い山 *Τα Ψηλά Βουνά*」(1918 年) は小学校の国語読本に載せられ、若い世代の言語に大きな影響を与えた。先に述べたように、「死せる兄弟」を劇に仕立てている。

山中の羊飼いのパノス・クララスは病に冒され死にかける。知人たちは意識のないパノスを担架に乗せ、村の親戚まで連れて行くが、途中で何度も蘇生する。最後に、その水を飲めば生死が確定するという言い伝えのある川辺に運ばれるが、飲むのを拒み今度こそ本当に息絶える。「望むときに死んだ (II, p. 184)」。パノ

スは病に冒されていても、自己の生死を自己決定しようという強力な意志の持ち主である。「私の故郷では人々が死神（Χάρος）と格闘する姿がよく見られた（II, p.177）」。その姿は中世の英雄ディゲニス・アクリティスに繋がる。ディゲニスもまた打穀場で死神と格闘する民謡となって現代まで謳われ、勇者の理想像となった。自己の不敬な過ちのせいで死に切れないパサヤニス「吸血鬼」からは勿論、最初から魔物として存在するパラスホス「吸血鬼の息子」からも遠く隔たった対極に位置している。

11. 十九世紀末

最後に文学史では取り上げられることの少ない異端の作家にひとことだけ触れておきたい。ザキンソス生まれのニコラオス・エピスコプロス（Νικόλαος Επισκοπόπουλος, 1874-1944）はポオ、ボードレールに傾倒した耽美主義の作家。同郷のクセノプロスに見出され、パラマスのサークルに加わっていたが、リアリズムの風俗小説全盛のギリシャには住み場所がなかったのだろうか、27歳でパリに移住し、アナトール・フランスの下で活躍した。

「死後の生 *Ζωή μετά θάνατον*」（1894年）は、死にまつわる慄然たる幻視を科学的な文体で綴った、ポオが書きそうな作品である。

「最後の呼気の後、魂は身体から飛び去った（IV, p.65）」で始まり、死んだ「私」自身が語り手となって、死せる身体の変容—目、手、胸、心、腸、筋肉、血液—が冷静に記述されていく。腐敗は進み、「私」の骨の周囲には芳しい花が茂り虫が舞い始める。生前は目にすることもなかった壮絶な微生物の闘争を見せられ私は恐怖する。突然、見えない力で牽かれ落ちていき、第二の生が始まる。

他にも、屠殺屋が森で獣の群れの復讐を受ける悪魔的な「悪夢 *Εφιάλης*」（1893年）や、情事の中で髪にのみ神経が鋭利に感応するフェティシズムの散文詩「髪 *Ταμαλλιά*」（1898年）など、異常な空想を流麗な文体で綴った幻想譚を書いている。吸血鬼のような超自然の存在を描いているのではないが、いずれにしろ、現実の生活を活写しようとする同時期の潮流からは遥かに隔たっており、国内には追従者を見いだせなかったようである。

12. おわりに

本稿はマキス・パノリオスの労作『幻想短編』の所収作品を時代順に並べ替えて読むことで、現代ギリシャの幻想小説の胚胎、出現、発展を辿ってみた。

後ビザンツ期では魔術が扱われるにしろ、宗教の奇蹟譚の枠内で現れ、正教の

教えの正当性に奉仕している。作者が突然顔を出す、内容の真実性を主張するためである。啓蒙期、エプタニサ派、アテネ浪漫派に現れる幻想は政治的意図を持つ。幻視が語られる場合でも、その内容は近過去・近未来に直結した予言的な性格のものである。新アテネ派の風俗短編小説が現れる中で、ようやく伝統的な民話伝説の霊的なものが文学に顔を出すようになる。もっとも典型的なのは生と死の間で曖昧に存在する「吸血鬼」の素材であろう。同時に、語り口の工夫によって「作家」「語り手」「内容」のずれを表現することにより、より恐怖感を高めている作品もあり、近代の幻想小説の萌芽が認められる。世紀末に耽美派がいなかったわけではないが、ギリシャでは花開かなかった。

妖精物語を越えた幻想怪奇小説の出現は、理性主義の確立、科学技術の発展が前提であるとされる。理性・技術で把握し切れない超自然への恐怖・憧れを描くのが眼目だからである。『幻想短編』を読む限りでは、この段階の作品が目立ち始めるのは 1920 年代からのように感じる。都市の風俗小説のイメージが強い Γ. クセノプロスに「異常な目」(1926 年)があり、ギリシャ文学界では珍しい、自殺した二人の詩人 K. カリオタキスと N. ラパシオティスも「夢見る者」(1927 年)と「非常に奇妙な症例」(1933 年)、という不思議な散文を残している。それに何ととっても 20 年代の代表作家で、閉塞した小市民のリアルな生活を描くかと思えば、想像力溢れる異様な短編を書き続けた Δ. ヴティラスがいる。現代ギリシャ初の SF とされる彼の「地球から火星へ」発表は 1929 年である。

興味深いこの世代以降の作品については、稿を改めて論じたい。

注

- 1) Θεοδώρου - Λάζος (1998:171) .
- 2) Δημαράς (1987:235).
- 3) Πολίτης (1985:146).
- 4) Τσαντσάνογλου (1999).
- 5) Τριάντου-Κατωμένου (2006).
- 6) Πολίτης (1985:203)。ポリティスは、モラルの高潔さが超自然の説得性を高めている (Πολίτης, 1985:163) と買っているが、ディマラスはポリラスの短編を全く評価しない (Δημαράς, 1987:298)。
- 7) 時代の最先端の科学技術を活用して空想の世界を描く、という点では「サイエンス・フ

イクシオン Επιστημονική Φαντασία」も「幻想文学 Φανταστική λογοτεχνία」の一分類なのだろう（ギリシャ語では「空想」「幻想」の区別なく Φαντασία にかかわるものとして同一地平に置かれる）。カイヨワによれば、発生的観点からも、SF は類似機能を持つ「幻想小説」に取って代わるべく生まれたものである、と言う。「特定の時代におこわれる具体的な空想も夢も不安も、次の時代には、いかなる力も興味もないものになるだろう。現実が夢に迫いつき、不安が現実となってしまうので、充たされぬ欲求をあざむいたり、激しい不安をしずめたりする空想本来の機能が無効になってしまうからである。…このようにして幻想小説が妖精物語にとって代わったのであり、前世紀の幻想小説にはサイエンス・フィクションが、ゆっくりととって代わりつつあるのである。（カイヨワ、p.290）」

ちなみに、最初の現代ギリシャ SF は、ペトロス・ハリス Πέτρος Χάρης「地球最後の夜 Η τελευταία νύχτα της Γης」(1924 年)、あるいはディモステニス・ヴティラス Δημοσθένης Βουτυράς「地球から火星へ Από τη Γη στον Άρη」(1929 年)とされるが、Θεοδώρου-Λάζος(1998:15)はその先蹤としてラスカトス「木星への旅」を挙げている。

8) 吸血鬼譚を利用した A.カルカヴィツアスの短編「凶兆」(1899 年)や後述するパパンドニウ「パノス・クララス」でも、悪運をもたらす鳥として梟が登場する。Δ.ヴティラスは「錯覚 Η παραίσθηση」(1924 年)で魔女の誘いに紛う不気味な梟の声を描く。

9) 和訳あり。アレクサンドロス・パパディアマンディス、山口喜雄訳(1996)「キリストのパン」『エーゲ海学会誌』10 [茂木政敏・白石隆治編(2012)『ささやかなものへのまなざし 山口喜雄遺文集』pp.11-14]

10) 和訳あり。アンドレアス・カルカヴィツアス、東千尋訳(1999)「ゴルゴーナ」『エーゲ海学会誌』13、pp.29-33.

11) “ζούδιο”は“ζώδιον”から来ており、もともと「小動物」の意味。中世では「小さな像」「装飾用の動物の像・絵」の意で用いられるが、「悪霊」の意味は見られない。トルコ支配期に現れた意味か。

12) 引用は Καρκαβίτσας(1973²)による。

13) 物語中、息子に霊が取り憑いたのはオリーブの下で寝たせいだと母親は考えている。木陰での居眠りは凶兆とされているようで、以下で触れる K. パサヤニス「吸血鬼」の主人公も無花果の悪霊の下で生ける屍となる。後の時代になっても、例えば、A. テルザキス「忘れられし者 Ο ξεχασμένος」(1925 年)では無花果の下で眠る他所者が不吉の象徴とされ村人から忌み嫌われる。

14) “Ζούδιαρης”は“ζούδιο”を退治するのが専門の魔術師ないし医師。普通の人には見えない「悪霊」を見つけ、呪文、叫び声、発砲などにより追いつめ、封じ込める。かつて(カルカヴィツアスの出身地である)ペロポネソス北西部のアハイア、イリア県に多く、変死、自殺、疫病があると呼び出されて「悪霊」を追い払ったという(MEE, “ζούδιαρης”)

15) Ακαδημία Αθηνών, Ιστορικό λεξικό της νέας ελληνικής της τε κοινώς ομιλουμένης και των ιδιωμάτων, τομ.4, σ.125, 1953.

16) Γ. Μπαμπινιώτης, Ετυμολογικό λεξικό της νέας ελληνικής γλώσσας, 2010, σ.279. スロヴェニア

語、セルビア語、チェコ語、ポーランド語などの他のスラブ語族やアルバニア語、ルーマニア語、トルコ語などにもこの語は広がっているらしい (MEE, “βρυκόλακας”)。

17) Ε. Κριαράς, *Λεξικό της μεσαιωνικής ελληνικής δημόδους γραμματείας 1100-1669*, τομ.4, σ.191, Θεσσαλονίκη. 中世では“βουλκόλακας, βουρκόλακας”などの形で現れる。僧マルコスは「墓の中で死者の爪・髪・髭が伸びる、掘り返すと死体の姿勢が変わっている」といった吸血鬼伝説の特徴を科学的に説明して、迷信を打ち消そうとしている。MEE には書かれていないが、「死体の身体が膨れ上がり、刺すと流血する」という点にも触れられている (Στ. Λάμπρος (ed.) Μάρκου μοναχού Σερρών Ζήτησις περί βουλκολάκων. *Νέος Ελληνομνήμων*, τομ.1, σσ. 336-352, 1904)。「髭無男のミサ」では、怒り心頭の人物を描写するのに「ひねり殺そうと彼女に近づいた。その眼は異常に燃え上がり、その髭は吸血鬼になった死者 (νεκρού βρουκολακισμένου) のようだった」と (動詞の分詞形で) 使われている (H. Eideneier (ed.) *Spanos, eine byzantinische Satire in der Form einer Parodie*, p.115, 1977, Berlin)。

18) Σπυριδάκης (1962:309-10). さらにヨーロッパにもこのモチーフは広がっており、ドイツ作家 G.A. Bürger のバラード「レノーレ *Lenore*」(1773) との類似は早くから指摘されているが (Ιωάννου,1983:34)、女主人公が死んだ婚約者の霊によって墓場へ誘われ、周囲では亡霊が踊り狂う「レノーレ」の方が数段怖ろしい。なお、この作品は最後のエプタニサ派ロレンツォス・マヴィリス (Λορέντσος Μαβίλης, 1860-1912) がギリシャ語に訳しているが 墓場で踊る亡霊たちには“βρικόλακοι”の語が当てられている (Ιωάννου,1983:173)。

19) MEE, “βρυκόλακας” の項目は「吸血鬼」になる要因を次の四つに分けている。「死せる兄弟の歌」はこのうちの (3) に該当するだろう。

- (1) 「魔術的」埋葬前の死体を犬猫や敵が踏み越えた場合。
- (2) 「宗教的」神父が適切に埋葬しなかった場合。破門された者。洗礼前に死んだ嬰兒。
- (3) 「倫理的」生前不正をなした者。殺人者。不完全な仕事を残したまま亡くなった者。
- (4) 「論理的」変死した者 (自殺者、殺人の犠牲者、事故死者)、吸血鬼により穢された者 (吸血鬼の食べ残しを食べる、吸血鬼から授乳を受ける、など)。

20) Κ. Πασαγιάνηςが収集した『マニの挽歌と民謡』所収のある民謡では、戸口を叩くアレティを怪しんだ老母が「お前はアレティじゃない、九人の兄弟を喰った吸血鬼 (βρυκόλακας) だ」と応えている。(Λύντεκε, 1947: 5)

21) Ιωάννου (1983:22-3).

参考文献

- Δημαράς, Κ.Θ. (1987⁸) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας, από τις πρώτες ρίζες ως την εποχή μας*. Ίκαρος.
- Θεοδώρου, Νίκος – Λάζος, Χρήστος Δ. (1998) *Βιβλιογραφία Ελληνικής επιστημονικής φαντασίας (από το Λουκιανό μέχρι σήμερα)*. Ζωσιμαία Δημόσια Κεντρική Βιβλιοθήκη Ιωαννίνων.
- Ιωάννου, Γεώργιος (επιμ., 1970/1983) *Το δημοτικό τραγούδι. Παραλογές*. Ερμής.
- Καρκαβίτσας, Ανδρέας (1973²) *Διηγήματα του γυλιού*. Εστια.
- Κωστούλα, Δέσποινα (επιμ., 1991) *Αγάπιος Λάνδος, Γεωπονικόν, Βενετία 1643*. Εκδ. Τήνος, Βόλος.
- Λύντεκε, Εντβιγης (1947) *Ελληνικά δημοτικά τραγούδια*, Ακαδημία Αθηνών.
- ΜΕΕ: *Μεγάλη Ελληνική Εγκυκλοπαιδεία*, Πυρσός.
- Παρασόγλου, Γ.Μ. (επιμ., 1993) *Ανδρόνικος Μούκιος, Γεώργιος Αιτωλός, Αισώπου μύθοι*. Εστία.
- Πολίτης, Λίνος (1985⁴) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας*, Μορφωτικό Ίδρυμα Εθνικής Τραπέζης.
- Πολίτης, Ν.Γ. (repr.1975) *Εκλογαί από τα τραγούδια του ελληνικού λαού*. Εκδ. Διονύσος.
- Σινόπουλος, Π.Α. “Αγάπιος Λάνδος.” *Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, τομ.1, σσ.54-56.
- Σπυριδάκης, Γ.Κ. (1962) *Ελληνικά δημοτικά τραγούδια (Εκλογή)*, Τομ.Α, Ακαδημία Αθηνών.
- Τριάντου-Καψωμένου, Ιφιγένεια (2006) “Η σχέση ανάμεσα στον «Ανώνυμο του 1789» και τη «Γυναικά της Ζάκυθος» του Διονυσίου Σολωμού.” Ευρωπαϊκή Εταιρεία Νεοελληνικών Σπουδών, Γ΄ συνέδριο της Ευρωπαϊκής Εταιρείας Νεοελληνικών Σπουδών. (http://www.eens-congress.eu/?main__page=1&main__lang=de&eensCongress_cmd=showPaper&eensCongress_id=42).
- Τσαντσάνογλου, Ελένη (1999) “Ο Μικρός Προφήτης και ο Μεγάλος Συγγραφέας.” *Εισαγωγή στην ποίηση του Σολωμού. Επιλογή κριτικών κειμένων*, επιμ. Γ. Κεχαγιόγλου, Πανεπιστημιακές Εκδόσεις Κρήτης, Ηράκλειο.
- Φαρμάκης, Φρ. “Νούκιος Νίκανδρος ή Ανδρόνικος.” *Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, τομ.10, σσ.559-60.
- Χατζηφώτης, Ι.Μ. “Κοραής Αδαμάντιος.” *Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής*

Λογοτεχνίας, τομ.8, σσ.614-39.

ロジェ・カイヨワ、三好郁朗訳（1966）「妖精物語から S F へ」〔東（2012:271-316）〕

アンドレアス・カルカヴィツァス、東千尋訳（1999）「ゴルゴーナ」『エーゲ海学会誌』13、pp.29-33.

小泉八雲、池田雅之訳（1915）「文学における超自然的なるもの」〔東（2012:137-156）〕.

佐藤りえこ（1995）「パパディアマンディスの木のイメージ —『高貴なる櫨の木の下で』を素材にして—」『プロピレア』7、pp.24-38.

澁澤龍彦（1970）「幻想文学について」『ユリイカ』4月号〔東（2012:16-23）〕.

西崎憲（1998）「英国短編小説小史」『英国短編小説の愉しみ 1 看板描きと水晶の魚』pp. 197-213、筑摩書房.

東雅夫（2012）『幻想文学入門』筑摩書房.